

日本古典文学大辞典

第五卷



は—め

日本古典文学大辞典

第五卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第五卷 第五回配本(全六卷)

一九八四年一〇月一九日 第一刷発行

定価 一三〇〇〇円

編集者 日本古典文学大辞典
編集委員会

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-15-15
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三六二四二二
振替 東京六三六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

第五卷

は—め

は

梅庵古筆伝

〔著〕著 内閣文庫蔵本(木村孔恭写)の書名は「梅庵由己古筆屏風所載古人伝」。天正十九年(一五九)成立。【内容】手鑑(紙)などに収録される古筆の筆者についての略伝。宸翰・親王准后・公卿諸臣、地下に四大別する。宸翰の項は、天智天皇から後奈良天皇聖徳太子・光明皇后を含む)まで十八名。親王准后の項は、舍人親王から覚愨准后まで十名。公卿諸臣の項は、淡海公(藤原不比等)から肖柏まで七十七名で、この中に藤原道長をはじめ、小野道風・藤原佐理・藤原行成ら三蹟、西行・藤原俊成・同定家らの歌人を収録する。地下の項は、慶運から細川高国まで二十五名で、連歌師が大半を占める。これらに、藤原公任・同定頼を追記し、重複を除き、都合一三二名分を掲載する。ただし、弘法大師ら三筆をはじめ、世尊寺家の主要な能書の一部、法性寺流の祖藤原忠通らが欠落するなど、古筆伝としては不完全な一面が指摘される。【翻刻】続群書類従31輯下。〔古谷 稔〕

梅園拾葉

〔著〕三卷三冊。随筆。三浦安貞(三浦梅園)著。天明元年(一八一)九月自序。同二年正月小野春樹跋。安政三年(一八一)

公)大阪文海堂敦賀屋九兵衛・同宋栄堂秋田屋太右衛門刊。外題簽・扉に「梅園叢書一名拾葉、第一集」とあり、内容的には必ずしも同じではないが、『梅園叢書』の第二集として出版されたものである。【内容】応答書簡・記録・論説・随筆の十五條より成る。書簡は「答上田養伯(二通)」、「答辻玄養」、「答多賀墨卿」、「同再答」、「同三答」の六通。中で安永六年(一七九)十二月付の「答多賀墨卿」は、梅園の主著「玄語」における主題、反観合一思想を平易に説いたものとして注目されるが、刊本では全文が省略されており、写本で伝えられる。論説は三条、うち「戲示学徒」は広く知られたものである。記録は三条、いずれも桜島噴火についての文。随筆は三条、うち「長州赤間関二人のうかれ女(豊前僧禅海)が」とに著名。なお、梅園の文章は、生存中に『梅園後拾葉』(鉄漿訓「奉公之道」二十條)が成り、残余の文章七編は、大正元年『梅園全集』編纂の折に『梅園拾葉』と題されて収録された。【諸本】三十三丁に及ぶ

長文の「答多賀墨卿」書簡を収める写本『梅園拾葉』二冊は、大分県立図書館蔵の『碩田叢史』の内にある。この写本は刊本とは異なり、「桜島火災因説」「戲示学徒」(長州赤間関二人のうかれ女)の三条を欠くが、梅園自身による編集形態を残した写本かと思われる。【翻刻】梅園全集・下。日本随筆大成新版2期5(旧版2期3)。〔井上敏幸〕

梅園叢書

〔著〕三卷三冊。随筆。三浦安貞(三浦梅園)著。安政二年(一八一)大阪文海堂敦賀屋九兵衛・同宋栄堂秋田屋太右衛門刊。刊本には「安政二乙卯年三月官許、

同上梓」とあるが、成立時期については、なお不明な点が残っている。梅園自身の跋に「寛延三年九月」とあり、この寛延三年(一七六)は梅園二十八歳、この頃より書き始めたものかと言われている。【内容】自跋に「灯の下に独坐して人情世態思ひつゞくるにしがたひ」書き集めたというところ、人生万般にわたる所感・教訓を、和漢の例話・諺を多用しつつ、梅園の著作としては最も平易に述作されたものである。長文のものは九丁余に及び、短いものは二行に満たないが、計四十九條を収める。各条、生活に密着した問題を採り上げ、儒者・医家としての教誡を述べているが、中に「予易を讀んで、原始反終(始めを原(恐)ね終りに反るといふにいたつて豁然として悟る)の如く、自己の思索の跡を記したのももある。二十九歳で条理学に達した梅園をうかがわせるものである。【翻刻】梅園全集・下。日本随筆大成新版1期12(旧版1期6)。〔井上敏幸〕

梅園日記

〔著〕五卷五冊。随筆。北静廬(静)著。石橋真国校。弘化二年(一八二)刊。朝川善庵・岸本由豆流の序、西島蘭溪の跋を付す。「梅園」は静廬の別号。「日記」は日記故事、即ち「楊文公家訓」の「童稚日記」故事をふまえたのであろう。【内容】巻一は三十七章、巻二は三十六章、巻三は三十四章、巻四は三十七章、巻五は二十八章より成る。風俗・慣習・俚諺・行事などに關する事項や、古歌・古文中の難語のよみや解釈に關して、広く諸書を渉獵して考証したもの。善庵の序に狩谷棧斎と並べて静廬の博識を賞しており、考証の厳密さにやや欠ける点はあるものの、静廬の学殖

が縦横に發揮された興趣に富む隨筆である。巻六の刊行を予定していたらしいが、未刊に終った。【諸本】伝存する刊本はすべて弘化二年版であるが、初印・後印の別については未詳。岩瀬文庫に巻四の稿本一冊が所蔵されている。【翻刻】日本隨筆全集10。日本隨筆大成新版3期12(旧版3期6)。百家説林・続編上。〔梅谷文夫〕

俳画

作画の一体。一語で言えば画によって俳句した作品。その条件としては「余白の美」を尊ぶこと。それは俳句自体が余白を味わう詩であるからである。したがって画は可能なだけ省筆で描く。同時に着色も極めて軽淡か水墨であらねばならぬ。その結果余白が生じるが、これを巧みに生かし、描かないで、描いた以上の効果をおげるのである。優れた日本文芸の妙諦は、この余情を出し、それを感受することにある。中国にも減筆体の描法があつて、南宋の梁楷(かひ)はその代表作家であり、彼の「六祖截竹図」は有名である。しかしこれは俳画でない。高僧・貴顕・学者諸家が描いた戯画・草画でも、俳味の感じられないものは俳画とは言えない。また俳画には自然と人事の対応が必要である。人物は樵夫・農人・遊女などあらゆる庶民のくらしからも取材するが、これらは高い格調で表現せねばならぬ。貞門・談林・蕉風の俳人の描いた画にも俳画は少なく、多くは狩野派・大和絵派のものである。貞門に立圃(たか)があるが、彼の描いた「休息歌仙」中の画はユニークで、在来の歌仙画と大きく趣を異にしてユーモアがある。これを俳画の嚆矢と言ひ得よう。芭蕉は幼少から絵稽古をはじめ、すこぶる能画家で、延宝末(一六六)の

「枯枝からす・笠やどり」や貞享(六六)の『甲子吟行画巻』など、はやくも優秀な画作をのこしている。しかしこれらは俳画ではなく、俳画は最晩年の画作に見出される。芭蕉は晩年に「かるみ」を唱導したが、それが画の上にも現われた結果である。真の俳画と言えるものは、安永・天明(三七)天竺の蕪村によって開花した。彼は「はいかい物草画(俳画のこと)、凡海内に並ぶ者、覚無之候」と自負している。これは彼が南画と俳諧との両道を併せて習熟した結実である。蕪村はまた『奥の細道画巻』若竹自画賛「花見又平」など幾多の名俳画をのこしている。門人月溪も明媚な多くの俳画を描いた。以後近世末の俳人もおむね俳画を描いたが、低俗のものが多し。近代の正岡子規・夏目漱石も好んで画作したがそれらはいわゆる俳画とは異種のものといえよう。現代は俳画ブームと言えるほど作家は多くて、向上を目差している。ここで注意すべきことは、その画と賛句のつけ方で、近世を通じて「じか付」であったのが、今は「句い付」になっている。これはたしかに一進歩である。

【岡田利兵衛】

俳諧 和歌・連歌などに対する、わが国詩文芸のジャンルの一つ。

【名義】元来「俳諧」とは滑稽を意味する漢語であって、滑稽味のある和歌を「俳諧歌」(俳諧歌といふ、同じくおかしみを主とする連歌を「俳諧之連歌」(俳諧連歌)とよび、やがてそれを略称して「俳諧」とのみ呼ぶようになった。そしてついに、連歌とは別個の、それに対立する文芸形式の称となったのである。なお、古くは「誹諧」と書かれた例が多いが、『古今和歌集』において「万葉

集』以来の戯笑歌の系統をひく滑稽味のあつた和歌を「誹諧歌」の部立のもとに集めたとに由来する用字で、「誹」の字は音・義共に「俳」とは異なり、誤用といえるが、古くはしばしば「誹」の字が用いられた。また「俳諧」の語は広狭二義に用いられる。芭蕉が「俳諧においては老翁が骨髄」(字陀法師)と自負する場合の俳諧は、俳諧の付合(い)、「い」はゆる連句を意味しており、同じ芭蕉が「俳諧自由(去来抄・先師評)」という場合は、「和歌優美」に対する発言で、連句のみならず発句・文章をも含めたジャンルとしての俳諧を意味している。

【沿革】『発生期』連歌は、その形式の本来性から、二人の唱和(対話)に成るものであつて、発生期の平安時代の短連歌、たとえば凡河内躬恒と紀貫之の唱和とつたえられる(奥山に船漕く音の聞ゆるは)なれる木の実やうみ(海熱渡るらん)後頼朝のなどの作例の示すように、機知的な問答であり、おかしみを旨とするものである。その意味では、初期の連歌はすべて「俳諧之連歌」と呼ばれるのである。が、時あたかもいわゆる新古今時代を迎えて、連歌も連歌の形式のままに和歌的な情趣、ひいては幽玄・さび・ひえなどの文芸理念を追究する抒情的傾向に引きずられる。かかるまじめな和歌的連歌(有心連歌)と、連歌本来の形をのこす機知的滑稽を旨とする連歌(無心連歌)に二分化され、それが別個のものとして意識されるようになる(↓有心無心連歌)。文和五年(三三)撰進の『菟玖波集』(『新撰菟玖波集』)には、「雑体連歌」の一つとして「俳諧」の部立がはじめて見え、古来の作例が集められている。それが明応四年(四五)撰進の『新撰菟玖波集』になると、「俳諧」の部立が

なく俳諧連歌の作例が採録されていない。この事實は、俳諧連歌が行われなかったのではなく、俳諧が別個のものとして意識された結果と考えられる。当時の俳諧は、本連歌の座として談笑の間に作られたもので、形式にも拘わらぬ「言捨て」の俳諧であつた。この「言捨て」の俳諧が、はじめて記録され撰著となるのは、『新撰菟玖波集』のわずか四年後の明応八年のことである。すなわち「人のかたれる口うつし、己がききみ、人にがばかり」と、撰者見聞の俳諧発句・付合を集録した最初の俳諧撰集『竹馬狂吟集』である。そして十六世紀ともなれば、天文九年(二五)頃までには、室町俳諧の代表的撰集、宗鑑の『犬筑波集(俳諧連歌抄)』、天文五年から同九年には、最初の俳諧千句『守武千句』の試みがなされるようになった。長句と短句の付合という形は連歌とかわらないが、当時和歌・連歌から疎外されて来た日常の俗語(俳言)を取り入れることによつて、連歌の規制を離れた気軽さがあつた、自由な用語・素材・文脈から、戯笑性と通俗性を示す俳諧の特性が顕著である。多く見られる笑いは、大らかな性的な笑いである。前句ではいかにも性的な事実をのべていると思わせておいて、付句でぐらつとはぐらかす手法、「毛のあるなしはさぐりてぞしる」(弟子もたぬ坊主はかみを自剃して)などの付合が特徴的である。酒間談笑の俳席で、吟声によつて付句を聞く「言捨て」の俳諧であるだけに、はぐらかしの効果は一層である。その席の無邪気な哄笑が思いやられる。

【貞門】上述のように、連歌に対して従属的な位置にあつた俳諧が、江戸時代になるとジャンルとして連歌に対立するものにな

る。指導者貞徳によつて本質を規定し式目を定められた俳諧は、あたかも到来した刊本時代の新しい機運に乗じて空前の拡がりを見せる。この門流を貞門と称する。重頼編の『犬子集』(寛永十年(三三)刊)以来西武編『鷹筑波集』、良徳編『崑山集』、貞室編『玉海集』など、大部の俳書が統々刊行される。かかる大部の俳書刊行を可能にする当時の俳諧の経済的基盤、ひいては俳諧にかかわる人たちの身分的限界が考えられるが、前代末までに全国各地に浸透していった地下(心)連歌の作者層を基盤として、全国的に拡がり俳諧人口が俄かに増加する。

『犬子集』の作者付を見れば、京都五十一・堺十九・大阪一・伊勢山田百・江戸五・因幡二とあり計一七八名であるが、二十年後の『玉海集』になると、その作者は山城・大和・河内・摂津以下、北は出羽、南は薩摩に至る三十七か国にわたつており、実に六五八人に及んでいる。前代俳諧の非合理性や猥雑はもはや許されないうで、「俗言を嫌はず作する句を俳諧」といひ、「百韻ながら俳言にて賦する連歌」が俳諧であると規定される。つまり俳言の使用によつて通俗性・滑稽性をめざすもの、付合は親句体で、懸詞・縁語で仕立てられた上品な滑稽が基調となる。

【談林】貞門俳諧の不徹底性、その微温的特性にあきたらず、やがて寛文末(一六七)頃から、宗因を中心として新しい宗因流のち談林俳諧と呼ばれる一派が誕生する。井原西鶴・惟中・高政・松意らの一派である。そして、この猥雑をことさらに嫌わぬ自由奔放な俳風は、多くの追隨者をうみ談林調が確立する。俳諧を「萬言(び)」と規定し、「おもふまゝに大言をなし、かいてまはる

ほどの偽をいひつづくる」(惟中『俳諧蒙求』)を俳諧の骨法とする奔放な詩論に支えられた俳諧である。付合は親句体で詞付(註)物付)を主とするため、句意の連絡が疎かになりがちなところから、次第に「あしらひ」による心付、前句の句意からの発想による付けが多くなる。また詞付によりながらも、句意の連続を、ことさらにあらぬ方へずらして付ける異体の飛体(註)が生ずる。古典的言辭にことさら卑近な俳言をたち入れて、俳諧的表現と和歌的表現を一句のうちに混在させる不調和から生ずる滑稽、思いきったパロディによる古典の卑俗化、極端な擬人法による非現実非条理のおかしさ、矢数俳諧を生みだす速吟などが、談林俳諧の特質として指摘することができ。延宝末期(一六八二)に見える漢語の使用、漢文調の流行、極端な破調字余りも、新奇を求める傾向の一つではありながら、この句体の渾沌の中に、失われた詩味を求めようとする試みともいえる。貞門旧派との職業俳人意識にとらわれた瑣末不毛な論争、矢数俳諧の競技にあげられた俳壇の現状から脱け出て、新しい俳諧を指向する人たち、桃青(芭蕉)・信徳・言水・来山ら、「延宝九年の比(註)より骨髓にとをりて」(註)や、五とせを経て貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひもつけし(註)「独ご」という鬼貫もいる。

緊迫したリズムによってうたい上げられる独特の詩味をたえた天和調、貞享蕉門の風狂の世界のもつ浪漫主義を経て、元禄(一六八七-一七〇四)の「猿蓑」的円熟に到り、さらに晩年高悟帰俗の「かきみ」の句境に至る。こゝとは深い余情においてとらえられ、付句は疎句体、滑稽はもはやここでは高次のユーモアとして理解される。芭蕉は、自己の風雅を、西行の和歌、宗祇の連歌、雪舟の画、利休の茶と貫通するものだけに、「衆にさかひて用ふる所なし(柴門ノ辞)」というところがある。俳諧師の座を拒否して、西行・杜甫の跡を慕い、旅に生き、「新しきは俳諧の花と常に誠を責め精進を重ねて次々に新しい詩境をひらいて行き、不易流行・風雅の誠などのすぐれた文芸観を抱懐する孤高特異な存在である。かくして最高の詩的完成を遂げた芭蕉、その下に集った其角・嵐雪・去来・文章・支考・凡兆・野坡等々、すぐれた個性豊かな門人たちによって、元禄蕉門俳諧は花を咲かせる。そして以後の俳諧史は、おおむね元禄蕉門を基点として、その上に種々の俳境を展開して行くことになる。

【享保期】芭蕉没後の俳壇は、其角・沾徳(註)らの都市型俳諧の流れと、支考・野坡らの「かきみ」の延長になる地方農村型の俳諧に分化する一方、同じく付合文芸である雑俳の元禄期からの飛躍的盛行が見られる。社会の安定、識字人口の増加に伴う俳諧人口の増大、階層的な浸透、いきおい平俗化せざるを得ない趨勢になる。江戸を中心に、洒落風(註)俳諧・化鳥(註)風などと呼ばれる俳風が生れ、やがて淡々の「浪花(註)ぶり」など京阪上方地方にも江戸風の俳諧の勢力をのばす。都会風の洗練された

趣味性を示すものもあるが、技巧的末技の迷路に陥った謎的俳諧に墮するものが多い。付合はますます疎句化し、一句の独立した面白さ、うがち的興味が喜ばれ、付句だけで鑑賞される傾向に依じて、高句付句集の出版を見、川柳点の万句合から「俳風柳多留」が生れるようになる。一方、芭蕉晩年の「かきみ」を平俗化して、浄瑠璃や八文字屋本の盛行にうかがわれる「人情」に対する時代的嗜好に乗じて、付合の人事句に「工(註)みに人情世態を尽す(春泥句集・序)田舎蕉門が全国的に拡大し、農村社会に浸透する。

【中興期】この低迷の中から、芭蕉没後約七十年にして、芭蕉を慕い蕉風俳諧を復興しようという試みがなされるようになる。京都の嘯山・太祇らの『平安二十歌仙』や名やがてこの動きは全国的になり、京都の蕪村、中京の暁台、江戸の蓼太・白雄、伊勢の樽良、加賀の麦水・蘭更と各地におこり、門下に几童・召波らの俊秀を擁する蕪村一派のいる京都が中心的位置をしめ、各人が互いに交友関係を保ちつつ、期せずしてひとしく蕉風復帰を共通点とした。しかし、貞享蕉風の浪漫を喜ぶもの、「猿蓑」の円熟な個性的な差異のあることはもちろんである。かくして安永・天明期(一七九二-一八〇六)を中心とする約二十年余の期間であるが、天明中興俳諧の開花を見るのである。護國(註)の文人的文学論や中国画論に支えられた離俗の説となえる蕪村も、芭蕉の「此一筋の生涯とはちがって、画俳の二途を追って世の風塵にまみれつつも、文人的生活を送る。この一事を見ても元禄と天明の

時代の差は明らかであるが、天明中興俳諧によって、俳諧史は元禄蕉門とは異なった高揚期を迎え、別趣の清新な抒情、空想的美的世界の開頭を見るのである。

【化政・天保期】天明から寛政、更に文化・文政期(一八〇四-一八三〇)ともなれば、俳諧人口はますます増加し、業俳・遊俳を問わず、全国的に俳人間の交流が盛んになる。俳諧はますます趣味化し、「風雅の道」は形骸化する。個人的境遇や生活の辛酸から来る一茶の強烈な個性をのぞけば、この時代の俳諧は平準化された作風を免れない。わずかに遊俳としての豊かな教養と高雅な趣味性を具えた成美が数えられるであろうか。当時の大宗匠たる道彦、少し遅れて梅室・蒼虬・鳳朗など天保期(一八三〇-一八五〇)を代表する宗匠連が輩出するが、それぞれの特徴的な自分ももちながらも、時代の水準を脱し得ない。滔々たる趣味化傾向の赴く所、俳諧は矮小化し、小主観に安住していたずらに表現の小技を競うようになる。明治の正岡子規の俳諧革新に当って、いわゆる月並俳諧として攻撃の対象となり、ついに「発句は文学なり。連俳は文学に非ず」として、付合を抹殺するという武断的処置をうけ、わずかに発句が、性格をかえて近代俳句として更生することとなる。

【形式】ジャンルとして俳諧というとき、次の形式のものが含まれる。発句・連句はもとより、前句付などの雑俳一般、俳諧的文章というべき俳文、やや特殊なものとしては、美濃派の俳人などに多く試みられた漢詩の絶句・律詩などの形式を模した和詩から、ついに蕪村の「北寿老仙をいたむ」や「春風馬堤曲」などを含める仮名詩、あるいは宝曆・明和期(一七五二-一七七二)に涼袋(建

部綾足の首唱した片歌なども含まれることになる。発句は連句の発句としてのみではなく、独立して単独に制作されることがごく初期から行われ、季題(季語・切字)を含むことはもちろん、祝儀・哀悼・送別・留別など特別の機会に、それぞれの意義をこめて詠むこともちろんである。俳諧では賦物(ふぶつ)をとることはほとんどないが、順逆同訓の「廻文(回文)」「発句なども時に行われた。発句独詠の傾向は、連句の疎句化とともに、時代とともに次第に顕著になる。几董らが連句の勉強のために開いた月次(げつじ)の連句会(檀林会)の記録である「連句会草稿(「几董句稿」)を見ると、この会合が後には発句のみをつくる会合となってしまうことを示しているし、付合の巻に加点する点取俳諧よりも、月並発句合の方が多く行われる趨勢が著しくなってくるなど、時代による消長が見られる。俳文の称は広狭いろいろに考えられる。題材の観点よりすれば、『元隣(ひもと)の宝蔵(たから)』などから見られるが、俳文独自の文体を持ち、意識的に俳文としての自覚をもって書かれるのは蕉門の『風俗文選(本朝文選)』あたりからである。前期に『風俗文選』、後期に也有の『鶉衣(うす)』を俳文の代表的作例として、他は擬古文に類するもの、狂文との区別の紛らわしいものも含まれる。

【門流】俳諧の門流としては、貞門・談林・蕉門など時代による門流の区分、また阿蘭陀(あらんた)流・蕉風あるいは虚栗(うつら)調・化鳥風・洒落風・天明調・天保調など俳風による門流の区別もある。さらに俳系による区別のあることはもちろんである。およそ俳諧師たるもの、その門人中には師系をつぎ、何々庵などと師の別号を継承するものが出

てくる。ここに俳系による門流が発生する。かくて、例えば雪中庵(せうちゆうあん)三世蓼太(らうた)と名乗り、または師の俳号を襲名して巽窓湖(じゆんそうこ)十(二)世・風窓湖(ふうそうこ)十(三)世などと号することになる。継承の機に祝賀披露の俳席を設けることもちろんである。かくして雪中庵(風雪丞(ふうせつじやう)・太白堂(たいはくどう)・桃隣系(とうりんけい)・採茶庵(さいちやあん)・杉風系(さしかぜい)・夜半亭(やはんてい)・巴人丞(はにんじやう)等々の俳系による門流が生ずる。また伊勢の神風館(かみかぜ)弘氏系(こうしんけい)・大磯の嶋立庵(しまたてい)・飛騨高山の雲橋社(うねはし)など各地方にあつてその世代を継承されるものもある。芭蕉の墓所近江粟津の義仲寺の無名庵では、惟然以下の世代が継承され、毎年十月十二日の芭蕉忌の時雨会(ときあめ)は、四月十二日芭蕉像に新しい扇子を捧げる際の俳諧興行、奉願会が催され、時雨会には全国からの献詠などを集めた「しぐれ会」が逐年出版される。明和七年(一七九〇)重厚によって再興された嵯峨の落柿舎でも、重厚以下代々の世代が数えられる。以上のような例とは質を異にするが、代々俳諧を嗜んで来た家系による世代、例えば知足をはじめとする尾張鳴海の千代倉家などの例もある。

【俳諧師】およそ俳諧に携わる者のうち、職業として俳諧を嗜み、俳諧の加点添削指導などに対する点料収入、入句料などによって生計を立てる業俳と、他に生業をもちながら俳諧に遊ぶ遊俳とに分けることができる。この業俳が俳諧師であり、俳諧宗匠とよばれる。俳諧師となることを立机(たてうき)と称し、その時万句興行を催すのが例であるが、時代とともに万句は行われなくなつた。宗匠の生業も、時代とともに変化するが、諸方の俳席に招かれての出座指導、時には社中の支援によって撰集を刊行する。地方の俳友を頼つての行脚などのほか、例

年新春には歳旦帖を出して諸方に送る。天明期以後になれば、一枚刷の華麗な刷物(しよぶつ)を出すのが流行し、趣向を凝らした刷物が頻繁に配られる。また後期の宗匠が月並発句合を行うとなれば、募句・加点・開巻・上梓の一連のコースの定期的反覆、いわば月刊俳句雑誌を刊行するごとき作業で、俳諧師の生活は繁忙を極める。ただし、これらの生業は、時代、俳諧師の階層、結社の規模などによって繁閑様々であつて一概にはいえない。雑俳をも含めた俳諧人口の増加とともに、宗匠の数も増加し、その平均的教養水準の低下は免れないことになる。最下底の宗匠から、順次ピラミッド型に積み上げ構成された俳壇ができるわけである。彼らには文学者意識や芸術家的自覚があるわけでもなく、ただ、この道の祖師、芭蕉翁の道につながるという意識があるだけである。かくして俳諧師は、少なくとも文筆をたつきとする知的技能者としての最小の自覚をもちつつ、画工や他の芸能の師匠とともに市井の一隅に地位をしめるようになる。その中に数少ない幾人かまじめに祖翁の道を跡づけようとする人たちがいて、その少数が文学としての俳諧に携わることになる。

【座】俳諧は「座」に成り立つ。宗匠・執筆(しよ)・連衆で構成される一座の共同体、連衆の作句活動と、宗匠の捌(は)きとが相俟つて、作品の成否、出来ばえを決定するのである。およそその一座の構成は、一味同心めいた精神共同体的寄合(よせあひ)意識に裏付けられたものであり、外の世界とは一応隔絶された世界で、したがってその座の連衆間(れんしゆかん)の社会的身分の上下などは次元を別にするものという性格をもっている。俳席の床

の間に天神の名号をかけ、柿本人麻呂の像を祀るなどの会席の習慣にも、この寄合のよつて来る宗教的・習俗的な性格をうかがうことができる。このことは、上は芭蕉一座などの文学的連句の座から、末は末流宗匠の俳席に至るまですべて然りである。さらに、付合文芸の宿命として、作者は自句を投げだして付句作者の理解鑑賞にゆだねることによって自句を生かしてゆく、自句の取捨活殺を全く宗匠に任せ、その添削改作を甘受することがなければ、成り立たないのが俳諧である。その意味での人間関係の連帯感の上に成り立つものとして、封建的性根を免れ得ず、近代社会において連句の行われ難い理由の一つとなつてゐる。

【俳論】『守武千句』の跋に見える発言以来、俳諧の本質を論じた言説、作法・心得・技法・式目に関する文章、作品評、句合せの判詞などをまとめて俳論と称する。しかし体系的論理的に論述した俳論ははなはだ稀であつて、多くは断片的発言か、鑑賞批評の表出にとどまるものが多い。深い思想性に裏付けられた高次の芸術論といえる芭蕉の言説も、論理的であるとはいえない。他の文学論、たとえば歌論などと比較しても、論理性に乏しい点が俳論に特徴的といえる。また、貞門・談林・蕉門・中興時代と俳諧史の各期ごとにそれぞれ論戦が行われた。談林俳諧に対する保守派貞門の攻撃、談林側の反撃、蕉風時代の芭蕉を祖述した門人間の論争、中興時代の蓼太と雁石の論戦など、多くは個人的攻撃、瑣末の論争に終始し、文芸論として不毛に終るのが俳諧論戦の常である。これは論者が俳諧師であり、俳壇における業俳としての立場上の利害関係が然らしめるところが多いと考えら

れる。

【俳書】寛永十年刊の『犬子集』以来の俳書
の数は夥しい数に上る。しかもごく初期から
大部の俳書が印刷出版される。およそ近
世にはじまる印刷出版の機構を最大限に利
用したものが俳諧であるといえるかもしれ
ない。撰集・句集・論叢書・作法書はもとよ
り、歳旦帖、数多い賀集・追善集の類、絵
俳書、色刷りの一枚物、月並俳諧の刷物な
どと数えあげれば多種多様に上る。論叢書
の場合など、論難攻撃の書の出版に応じ
て、驚くべき短時日のうちに反論書が出版
される、出版機構との密接な関係がうかが
われるのである。社中の支援を得て集冊を
出版するのが俳諧師としての主要な業務の
一つであり、俳壇における格付けともな
る。ために、俳書出版の専門書肆が早くか
ら発生する。歳旦三つ物を専門に印刷製作
していた表紙屋庄兵衛が、俳諧書肆井筒屋
庄兵衛に生長し、後それぞれ時代時代に橋
屋治兵衛・花屋久次郎(菅墨)などと俳書出
版を専らとする書肆が生れる。俳書の形態
は、数量的にいえば半紙本が多いが、内容
によって形態が規定されることも少なく
なくて、たとえば千句・百韻など専門俳
士の連句作品が多く出版される談林時代に
は懐紙の形式をそのままに移し得る横本が
多く、それが蕉風時代になり多人数の句を
集める撰集が多くなると圧倒的に半紙本が
多用されるのである。貞門俳書・元禄俳
書・天明俳書それぞれ独特の書品を保ち、
高雅な趣味性豊かな造本になるものもあ
り、愛書家の喜ぶところとなる。したがっ
て江戸時代に既に俳書の蒐集家もあらわ
れ、阿誰軒の『誹諧書籍目録』など書肆の出
版俳書目録のほか、個人蔵書目録もある。

【影響】俳諧はすぐれて近世的であり、日
常生活に取材して俗のうちに雅を求め、実
（シ）を認めようとするもの。和歌の抒情詠
嘆とは別種の対象の捉え方をして即物的に
表現する。このような俳諧的な物の見方・
捉え方、自然人生との間に一定の距離をお
く余裕のある態度、華美典麗を避け、簡素
質実の美を喜ぶ皮肉な趣味判断、四季の変
化に素直に順応する季節感覚等々があらゆ
る文化面に拡がってゆく。かくして俳味と
称されるものが趣味生活の基準にまでな
る。俳諧の略画である俳画が生まれ、他の
ジャンルの文芸においても、発句的点描が
自然描写・情景描写の基調をなすようにな
る。近世においてのみならず、発句の短詩
形的発想、即物的な表現、省略を旨とする
彫琢が、文学表現の訓練に欠くべからざる
意義をもっていたこと、近く大正時代の作
家にまで及ぶところである。〔大谷篤藏〕
【参考文献】頼原退蔵『俳諧文学』(頼原退蔵著
作集3、昭和54年)。○鈴木勝志『俳諧史要』
昭和48年。○中村幸彦『俳諧の成立』(中村幸
彦著述集1、昭和57年)。○同『俳壇の構成』
(中村幸彦著述集9、昭和57年)。

【俳諧一葉集】はいかいつ 九冊(前編五冊・
後編四冊。薄葉の五冊本もある)。俳諧。
弘分(はぶん)・湖中編。文政十年(一八二七)八月刊。
万笈堂版。【内容】芭蕉の作品を、発句・
付合(連句)・紀行文・消息・句合評・遺語に
分類し集大成したもので、芭蕉全集の最
初。発句の部は、四季別編集で一〇八三句
(存疑一四三・誤伝三十七)を収録。付合之
部は、製作年次別に、百韻十三巻、歌仙百
二十余巻、その他の端物を配列し、収録に
努めている。「わずれ草」夏馬の運行(「あ
なむざんやな」の歌仙三巻は本書が初出で
ある。紀行之部には「甲子紀行野ざらし紀
行」(「かしま紀行」)卯辰紀行(笈の小文)』
『更科紀行』)おくのほそ道』を収める。文之
部には、従来の芭蕉文集などから四十六編
を収録。『蓑虫跋』は本書が初出。消息之部
には六十八通(存疑・誤伝三十三通)を収録。
元禄四年(一六九二)二月二十二日付怒誰宛のも
のは、本書以前に所収なく貴重である。句
合評には、『貝おほひ』など。遺語之部に
は、『去来抄』三冊子などより俳論を収集
している。【翻刻】『芭蕉一葉集』(勝峰晋
風編、昭和6年)。〔萩原恭男〕

【俳諧一串抄】はいかいつ 二冊。俳諧。六
平齋亦夢(ひら)著。天保元年(一八三〇)十二月鶯
園序、刊。著者亦夢は、文中に江戸の八咫
(や)の語を引くのでその関係の人か
とも思われるが、伝未詳。【内容】俳諧論
書で、詩歌連俳にはそれぞれ体格(たて)があり、
歌や連歌の格は「物を一筋に言ひ下す」
のに対して、俳諧の格は「此物を以て彼物
を言ひ論す事、たとへば人に物の裏を見せ
て、其表をさとしむる仕方なり」と言い、
芭蕉はこの体格によく長じていた故に中興
の祖と仰がれるのだとする。「俳句を作る
心得の事」(連句俳句差別の事)「発句の魂と
いふ事」その他十数条につき、発句三百余
を引例して俳諧観を説くが、うち百句ほど
は芭蕉以外の作を混同し、あるいは句形を
誤る等の欠点も見える。【翻刻】校註俳文
学大系・隨筆編。俳諧文庫『俳諧論集』。
〔宮本三郎〕

【俳諧五の戯言】はいかいつ 一冊。俳諧。
信徳編。元禄四年(一六九三)三月、何某序、重
徳跋。京都寺田重徳版。【内容】序跋によ
れば初心者向けの指南書。前半は「俳諧三
十六番発句合」として、左右対照的な題に
よる信徳の発句を合わせ、後半は「誹諧新
古付句合」として、同一の前句に対して、
左に古風の付句を、右に当風の風情景気の
付句を配した三十番を収める。付句に作者
名はないが、題簽に「信徳独吟」と銘打っ
てあり、信徳の作と推定される。信徳は、発
句合の冒頭に掲げる一文で、古風・当風の
是非を述べ、そのどちらにも荷担しきれな
い自己の立場を表明している。そのため発
句は、延宝・天和(一六五三・一六六四)頃の旧作も採
録。〔越智美登子〕

俳諧米切齒

二冊。俳諧。石橋

隣千葉春耕著。自序・白跋、門人源義隆跋・橋庵魯城居士北山彰跋。内題「雙輪再註糸切齒」。宝曆十二年(一六三二)刊。石橋隣蔵版。安永五年(一七七五)刊の四冊本では魯城跋が巻頭にある。【内容】千梅著「雙輪輪抄」(宝曆三年)の「四季の詞并イロハ奇名目」の註の再註で、百五十余項にわたって誤謬を正し、足らざるを補つてある。所説は才麿系の員九著「俳諧通俗志」と自著「俳諧誌抄大成」に多く拠つてゐる。翌年、千梅側から反論書「やきおほ根」が出た。著者は、浪華市隠を自称し、三権門、のち椎本矩州門。【白石佛三】

俳諧当世男

二冊。俳諧。神田蝶々子編。自序。土田宗伴跋。延宝四年(一六五七)月成。版元不明。【内容】上巻は四季類題別発句集、下巻は付句集。入集作者中、句数多き者は億丸・吟市・見石・観了・宗因・青雲・宗伴・政陳・書林・酒云・似春・在色・桃青(芭蕉)・泰徳・蝶々子・卜尺・不卜・幽山・嵐松等で、江戸新風作者が中心。例えば蝶々子の作「連中やぎつとめでたふ年の暮」ひよか／＼としらぬ男の寄りきつ、／＼もし旦那様此(心)うは書は」に見るごとく、作風は全編すべて談林風である。蝶々子序文の年記延宝四年七月は同人編「俳諧玉手箱」の序文年記延宝四年五月の二か月後である。『俳諧玉手箱』が時間的・空間的に蝶々子の俳諧活動を広く覆うのに対し、本書は現在の自己および周囲の俳境を示すものとして、二部作で構想され相次いで成立したものであろう。編集の実際には土田宗伴が多くあずかつたか。【翻刻】日本俳書大系「談林俳諧集」。古典俳文学大系「談林

俳諧集(一)。【森川 昭】
【参考文献】森川昭「神田蝶々子考」(説林)14、昭和41年1月。

俳諧時勢粧

六巻七冊。俳諧。松江維舟(重頼)編。自序。寛文十二年(一七二七)三月上旬自跋。同年刊。書肆名なし。【内容】巻一・二が発句撰集で、「古歌之詞」「歌詩文」「諷」(以上巻一)、「只句(心)」(巻二)に分類の上、各部分ごとに四季類題別に配列、巻二の最後に「追加四季発句を加え、住国別作者句引を付載する。発句総数一七二五、作者五〇四人。巻三は維舟の個人発句集で、寛文五年奥羽紀行、同八年九州紀行、同十一年彦根紀行の句々、同十一年の自撰四季発句、その他総計四三九句を収録。巻四(上下二冊)は寛文二年以降同十二年までに乞われて加点了、諸家の独吟百韻二十一巻、両吟百韻一巻、四吟百韻一巻、および維舟一座の三吟歌仙二巻と三吟百韻一巻を収録。巻五は寛文五年から同十一年までの維舟一座の百韻六巻と歌仙八巻、および維舟独吟百韻六巻、同歌仙一巻。巻六は寛文二年二月興行の維舟独吟千句、同三年三月および同四年三月興行の維舟独吟千句の各百韻第三までの抄録、同十二年の歳旦三つ物、最後に「時勢粧小鏡」と題する諸家の四季発句一〇一句を付録。【意義】巻初発句部は前集「佐夜中山集」の主旨・方法を踏襲する。巻三以下は寛文年間における維舟の旅行や年月を明記した連句や合点巻を豊富に収める点で、維舟の伝記や俳壇交渉を知る資料に富み、ことに立圃や宗因との交情を示す文章は注目に値する。巻頭自序は維舟の俳論資料として逸すべからざる内容を含む。【翻刻】古典俳文

学大系「貞門俳諧集(一)」

今 栄蔵

俳諧埋木

一冊。俳諧。季吟著。明暦元年(一六五五)成立、翌二年校合・浄書。延宝元年(一六五五)刊。京都井筒屋庄兵衛・同字兵衛版。【内容】「俳諧之事」六巻「発句之切字」「本哥之発句」「脇第三付面八句名残之裏」「祝言夢想之会之心得」「手爾於葉」「本哥」とは俳諧「皮肉骨之俳諧」「真草」の十五項に分類して、俳諧の作法を記す。歌学書「漢籍を引用するかたわら、宗祇・宗長・宗養・紹巴ら連歌師の所説、貞徳の口伝を援用し、自説を加えて解説する。構成などは季吟の着想によるが、「祖父宗竜、此法眼(紹巴)に受け伝へ待し抄物」「先師長頭丸(貞徳)に待し半松齋の抄物」等の伝授書による所が多い。明暦二年三十三歳で俳諧宗匠として独立、貞室らの先輩に伍して地盤を築き自門の指針とするため編んだものであろう。成立より刊行まで十九年の歲月のあるのは伝書として扱われていたからで、その公刊は延宝初年の談林派興隆にさらされた季吟門の危機打開の一策と思える。しかも内容の公表された翌年にも、「宗房生」や泉末満らに書写を免じ自ら識語を加えているのは、伝授が単なる文辞だけではないとの伝授観によるものである。なお同著者の、問答体十六項目から成る延宝元年冬成立の「俳諧用意風鉢」は同じく作法書ではあるが、本書にくらべ歌書の必要性を強調しているのは、十九年間の古典注釈歴が然らしたものであろう。【翻刻】古典文庫「季吟俳諧集」。【野村貴次】

研究「13、昭和32年3月」

○榎坂浩尚「俳諧埋木」について(『連歌俳諧研究』16、昭和33年7月)。

俳諧有也無也関

↓うやむやのせき

俳諧総合

二冊。俳諧。高政編。自序。延宝三年(一六五七)七月、京都林和泉刊。【内容】高政の処女撰集。上巻には所収の連句作者を和漢の知名画家の面風になぞらえた長文の自序があり、ついで貞室・元長・信徳・了味・宗因・正繼・似船・随流・弘氏・貞恕らの各独吟百韻十巻を収める。下巻には、維舟・順也・重道・倫員・季吟・正立・湖春・玖也・元順・光能・自悦・任口らの各独吟百韻八巻(ただし季吟・正立・湖春は三吟)、歌仙二巻(元順と任口)を収め、さらに「聞書百首立」として、西武以下光之・定共・維舟・光能・杉風・信章・律宿・了味・宗因・倫員・可全・梅盛・信徳・順也・定清・湖春・貞恕・友静・季吟・尚白らの発句百余句と、巻末に高政の独吟百韻一巻を収めている。【特色】京の貞門の主要な作者の作品を集めており、作風は温順なものが多い。三年後の「後集総合千百韻」では宗因に接近し、さらに「俳諧中庸姿(心)」へと展開するが、「中庸姿」に見られるような異体俳風の傾向は示されていない。しかし序文で宗因を筆頭にあげ、「宗因は呉道子が出山の仏に宛もかたちおとらじ。凡卑を抜て輪廻をされば、及所にあらずと称賛しているところなど、宗因流に対する強い共感がみられる。信徳なども「墨絵に山あり水あり、渡唐の僧筆をそめしに似たり。俗をはなれて風流なき所又風流」と評価されているが、巻頭に載る貞室・維舟・季吟ら貞門の古老に

研究「13、昭和32年3月」。

○榎坂浩尚「俳諧埋木」について(『連歌俳諧研究』16、昭和33年7月)。

↓うやむやのせき

二冊。俳諧。高政編。自序。延宝三年(一六五七)七月、京都林和泉刊。【内容】高政の処女撰集。上巻には所収の連句作者を和漢の知名画家の面風になぞらえた長文の自序があり、ついで貞室・元長・信徳・了味・宗因・正繼・似船・随流・弘氏・貞恕らの各独吟百韻十巻を収める。下巻には、維舟・順也・重道・倫員・季吟・正立・湖春・玖也・元順・光能・自悦・任口らの各独吟百韻八巻(ただし季吟・正立・湖春は三吟)、歌仙二巻(元順と任口)を収め、さらに「聞書百首立」として、西武以下光之・定共・維舟・光能・杉風・信章・律宿・了味・宗因・倫員・可全・梅盛・信徳・順也・定清・湖春・貞恕・友静・季吟・尚白らの発句百余句と、巻末に高政の独吟百韻一巻を収めている。【特色】京の貞門の主要な作者の作品を集めており、作風は温順なものが多い。三年後の「後集総合千百韻」では宗因に接近し、さらに「俳諧中庸姿(心)」へと展開するが、「中庸姿」に見られるような異体俳風の傾向は示されていない。しかし序文で宗因を筆頭にあげ、「宗因は呉道子が出山の仏に宛もかたちおとらじ。凡卑を抜て輪廻をされば、及所にあらずと称賛しているところなど、宗因流に対する強い共感がみられる。信徳なども「墨絵に山あり水あり、渡唐の僧筆をそめしに似たり。俗をはなれて風流なき所又風流」と評価されているが、巻頭に載る貞室・維舟・季吟ら貞門の古老に

対しては、評を加えておらず、彼らに対する無關心さがそこに示されている。所収作者はほとんど京都の人々であるが、発句に江戸の杉風や信章(素堂)のものが入集しているのは注目に値しよう。〔雲英末雄〕

俳諧大漢 はいかいおほ 一冊。俳諧。幸佐編。三径序。元禄四年(二六)閏八月、京中村孫兵衛刊。【内容】幸佐の第一撰集。京の諸家と興行の歌仙四巻、幸佐独吟漢和四十四(二)三巻、晩山との両吟漢和四十四一巻、四季別の諸家発句百五十余句、狂聯句一面二巻を収める。所収の作者は如泉・素雲・我黒・朋水・方山・和及・竹亭・湖春・只丸・言水・晩山・常牧・似船・助叟・敏士・林鴻ら、京の主要な点者を網羅しているが、地方の俳人はほとんど入集していない。漢和や漢句が多く入集するのが特色である。【付記】続編に「俳諧入船」(一冊。一翠序。京都井筒屋庄兵衛刊)があり、四十四(一)韻字、和漢、漢和等の連句、未達・常牧・立志・千春・春澄らの四季発句、および巻末に漢和式を収める。〔雲英末雄〕

俳諧温故集 はいかいおんこ 二冊。俳諧。蓮谷(二)編。守武・貞徳の文を序とす。自跋。延享五年(二四)二月刊。江戸西村源六ら版。【内容】編者が正徳(二七)一七三〇頃書き集めた古人の句十万余の中から抜粋し、現存江戸座俳人の句とともに四季類題別に配列したもの。初めに「四序混雑」として貞門以前の著名人・貴顕の句を掲げる。以下には守武・宗鑑・貞徳・宗因・西鶴・芭蕉・其角・嵐雪・鬼貫ら代表俳人の発句と、まれに俳文を収める。【翻刻】俳諧文庫「元禄名家句集付女流俳句集」。〔加藤定彦〕

俳諧歌 はいかいか 鹿都部真顔(おのりかほ)が文化五年(二八)頃から唱導した狂歌の作風の名称。天明狂歌(天明調)が気魄を尊重するあまり、疎放無軌道に陥ったのを是正して新面目を開こうとした。その主張とするところは、和歌が能ならば狂歌は狂言であるべきなのに、今の狂歌は歌舞伎の道外に類する。したがって、油煙齋貞柳・養・貞徳・豊蔵坊信海などの作品を認めないが、鎌倉・室町期の狂歌こそが本然の姿である。すなわち、『古今和歌集』以来の「俳諧歌」にならって上品に詠むべきだとする。真顔のこの主張は、狂歌は落書体であるとする宿屋飯盛(いせのり)・石川雅望との間に、真顔と交友のある高田(小山田)与清・平田篤胤らの国学者たちまで巻き込み論争を起こした。真顔は「類題俳諧歌集(文化十一年刊)」以後、「俳諧歌」の名を冠した狂歌集を続刊するが、真顔の作が「池水も声をばたてず何事もつつみかくして咲ける山吹」のたぐいで、いずれも狂歌らしい面白味に欠け、一般から親しまれなかった。〔粕谷宏紀〕

【参考文献】浜田義一郎「狂歌・川柳(岩波講座『日本文学史』9、昭和34年)。○粕谷宏紀「石川雅望年譜稿(内)」。高知大学学術研究報告28、昭和55年3月。

俳諧歌 はいかいか 和歌の内容及び表現による分類上の呼称。時に歌集の部立としても言われる。正統的な典雅端正な歌に対して、傍流的な卑俗滑稽な歌をいう。また、「はいかいか」と読み、おどけそしる歌というのが原義だとする説もある。【名義】その内容については、古来必ずしも明らかではなく、『俊頼髓脳』は「されごと歌」と解し、『奥義抄』は「滑稽也」として、「俳」の字を使

わないのを不審にしながら、単なる「戯言」ではなく、「弁説」「利口」「狂言」のように、まともな発想や表現の歌ではないが、物事を言いくるめて本質を突くものになっているという。「誹」とは字義が異なるが、早くから「誹諧歌即俳諧歌」と解されてきており、滑稽に幅を持たせて、機智・道化・諷刺・皮肉といった多様な内容のものを受けとめれば、原義的なものとさほど差はないだろう。ただ、『古今集』では誹諧歌が短歌(長歌)や旋頭歌などと共に「雑躰(ざつたい)」の部立に収められており、やはり発想や表現において正格な和歌とは異質な風体のものであり、弁別されていたわけで、内容ばかりではなく表現の特異性にも注目する必要があるのである。【沿革】誹諧歌は『万葉集』巻十六の「謗」「嗤」「嗤笑」「嗤嗤」「嗤嗤」などの題詞や左注を持つ二連の歌に先蹤を求めることができ、さらに歌垣の掛合いの歌や問答歌に溯行し、呪術的な和歌に根源を発するものといわれ、後の神祇歌・釈教歌との関連もでてくる。言語的遊戯性からいえば、物名歌と近接する面もある。『統詞花和歌集』には「戯笑の部立が設けられているが、勅撰集では『古今集』以来「誹諧歌」の部立で一貫しており、『後拾遺集』『千載集』『続千載集』『新千載集』『新拾遺集』『新統古今集』などに「誹諧歌」の部立が見られ、『雑歌』の部立の中にも誹諧歌的なものが収められていることもある。【特色】擬人法や縁語・懸詞の技巧が過度なまでに用いられていること、奇異卑俗な語句用法が用いられていること、発想や趣向が奇抜・意外・大袈裟なものであることなどによって、軽妙洒脱・機智諷刺・卑俗猥雑・暴露諷刺・稚氣蒙昧など多様な戯笑滑稽の世界を展開する

ものであったことが指摘できよう。後世、俳諧の連歌や狂歌などが発生し、俳諧というジャンルが確立されるに至って、俳諧味という美的理念も意識されるようになる。近世では「俳諧歌」として下河辺長流の『晩花集』、契沖の『漫吟集』、香川景樹の『桂園一枝』などに見られる。〔小町谷照彦〕

【参考文献】麻生磯次「笑の研究(昭和22年)。○竹岡正夫「古今和歌集全評釈(昭和51年)。○高畑玲「誹諧歌―和歌史の構想序説(『国語と国文学』昭和56年10月)。

俳諧家譜 はいかいか 二冊。俳諧系譜。丈石編。秋蛙序。自序(漢文)。九々鱗子跋(漢文)。宝暦元年(二五)十一月刊。大阪梁瀬伝兵衛ら版。【内容】主として京都における貞門系点者の系統を明らかにするために編まれた系譜で、江戸中心の「綾錦(享保十七年(二五)刊)」に対したものである。「鼻祖直弟譜」「荒木田支流譜」「浪華点者家譜」「大津南都点者譜」その他から成り、印譜及び「京師点者門弟発句」各一句を添える。奥付に「諸国舊聞俳諧家譜後篇全二冊」と近刊予告があるが刊行を見ず、のち十口によって、明和八年(二七)に「俳諧家譜拾遺」、寛政九年(二九)に「俳諧家譜後拾遺」が刊行された。【編者小伝】丈石は京都の人。早川氏。別号千載堂。のち剃髪して宗順。知石門。『筆舞台』千載堂百歌仙「ありのすさみ」等の著がある。安永八年(二七)没、八十五歳。【翻刻】日本俳書大系「俳諧系譜逸話集」。〔松尾靖秋〕

俳諧勸進帳 はいかいかん 二冊。俳諧。路通編。自序。其角跋。元禄四年(二六)刊。

京都井筒屋庄兵衛版。前年十一月十七日の夜、観音の霊夢により俳諧の千日行を発願し、廻国勧進して作品を得、其角・曲水の助力のもとに本書を編むという。【内容】上巻に、四季発句二百五十余句、曲水宛芭蕉書簡、月山発句合を、下巻に、其角序・沾徳跋を付した龜翁作「花摘追加の発句五十一、路通一座の歌仙八巻・五十韻」巻を収め、能狂言の囃子詞に似せた其角跋を添え、巻初に「勸進標白句」を据え、祝意を込めた跋で結ぶ作品の編成は「阿羅野」に通い、笈を負って俳諧勧進する能のワキツレ的路通廻国の姿勢は、『笈の小文』における能趣向の旅にならうもの。【翻刻】日本俳書大系「蕉門俳諧前集」。古典俳文学大系「蕉門俳諧集」。

〔石川真弘〕

俳諧錦繡 二巻。俳諧。元禄十年(一六九七)山松子序。単行の刊本はなく、天明八年(一八一八)刊「其角七部集」所収のもので知られる。【内容】其角の編著、いつを昔「雑談集」「句兄弟」の三書から適宜連句や発句文章を抜き出したもの(三書以外からりん女の一句入集)。山松子の序では、其角の連句二十巻を抜粋した集というが、事実は発句や文章も交え連句の数も合わない。さきの三者のみから選ぶものも自然であり、「いつを昔」から採録されたものには、その再刻本の誤りを数か所にわたる踏襲している。本書は、其角編でなく「其角七部集」刊行の折に作られた偽書であると考えられる。【翻刻】俳諧文庫「其角全集」。其角全集。校註俳文学大系・七部集総覧編2。

俳諧口三味線 一冊。雑俳。

〔石川八朗〕

華洛瀟蛙編。自序。如水跋。元禄十五年(一七〇〇)三月刊。京都永楽屋七良兵衛版。瀟蛙は如水の匿名とすべきであろう。【内容】只丸・鞭石・如水・林鴻・言水・風山・幸佐・定之・古柳・我黒・晚山・近之・女草・如泉・玉意・以文・空指ら点の前句付、和及・晚翠の付句、四季発句、京名所を詠み込んだ洛陽名所発句、傾城名詠込発句を三句ずつ十二月に配した「傾城名寄発句歌仙」について笠付を収め、最後に秘事の「てにをは」を入れた如水の独吟歌仙表六句を添える。量的には笠付が半ばを占めるが、「洛陽名所発句」「傾城名寄発句歌仙」を中心に、読物仕立てに趣向をこらした撰集である。如水跋に「烏帽子附笠附と云ふ事起りしより、惣じて俳諧の揚鉄高ク、位は鹿恋程に落ぬれ共、作意のはたらく所松の位より猶高し」と書き出し、轍士の「花見車」の趣向に共鳴する。時代の遊興的風潮に便乗し、書名を役者評判記「役者口三味線(元禄十二年刊)」にあやかっただ点者自撰の異色編。

〔宮田正信〕

俳諧觸 三千編。雑俳。初・二編は初代雪成編。三編以下は二代雪成(菅原)編。四・十編は峻堂雄序、十一・二十四編は有竹亭南山序、二十五編以下は湖海道入序。明和五年(一七六八)天保二年(一八三一)刊。江戸花屋久次郎版。他に、嘉永元年(一八二八)には沾山による再興本、安永四年(一七九九)には遠州屋版の異本「俳諧萬」も出てゐる。【内容】江戸座高点付句集。『武玉川(巻二)』以下の単独点者撰句集や、『童の的』(宝暦四年(一七五四)より続刊)のような点者総合高点集のあとを受け、初編には、宗匠を座別に分類、俳系、住所、好みの道具を

「釣月堂、浅草馬道百観音境内、前一漁門、長隠改須田一漁」恋の句に意味あり、買色の句よろし、兎角ひゆを本とすべし」のように指示、その高点句を例示して手引としての。後編「続編」三編で二編に相当)には、さらに句締めと点印譜を加えるなど、幾度も増補改訂を重ねた。二編程度で終るつもりが、好評を得たため、花屋久次郎が続刊したもので、安永四年の遠州屋版などは、この辺の事情を語るものであろう。『江戸割印帖』には、三編三冊、四編四冊、十六編七冊などと登録されているが、一名分半丁宛で、全百丁程度、座別別七冊本と、合冊二冊本が多く行われている。撰句は、前句を添えないのが原則であるが、前句を併記するものもあり、六編から「前句付」、十一編から「一句立」を注する作品が現われ、俳諧前句付や切句の一句立へ移行する実態を示している。「紙難も老にけらしなすはらして」女の肌はしらぬ大判」(文政八年刊二十七編、規外撰)のように、川柳狂句時代にも俳味を残しているのはさすがである。【編者】初・二編の編者露竹舎雪成は湖十門であるが、三編からの編者二代雪成書肆花屋久次郎が、近所の雪成にすすめたものであろう。花久は、安永八

年に「俳諧觸」四編、「俳風柳多留」十三編など四十三点の俳書を登録して書林組合仲間に入る。雑俳の出版に書肆としての命運をかけたものである。【鈴木勝忠】

〔鈴木勝忠〕

【参考文献】鈴木勝忠「江戸座俳諧の母胎」として文学2、昭和37年。○綿谷雪「俳諧」として文学2、昭和37年。○綿谷雪「俳諧」として文学2、昭和37年。○綿谷雪「俳諧」として文学2、昭和37年。

俳諧解脫抄 一冊。俳諧。*在色(享保三年(一七二二)三月成り、同年六

月在桂子写奥書。【内容】江戸談林発企の中心的存在である在色が、七十六歳の春、知友子弟のために書き残した、俳諧に関する随筆集。自己の俳歴と俳壇生活中の自他の逸話、記憶に残る句、俳諧の作意と心得、自句自判の、おおむね四部より成る。老齢による記憶違いや自賛の口吻も目立つが、寛文期の江戸俳壇の情勢、大阪の宗因・元順・西鶴らとの参会、「談林十百韻」刊行前後の経緯、芭蕉の宗匠立机の際の万句興行の支援、元禄期の京・江戸点者たちの無学ぶりなど、当時の俳壇の実情を知る上に参照すべき記事に富み、わけても「句は賤しからねど、云ふ所、大かた連歌の腰折也」という芭蕉に対する忌憚のない批評や、談林俳諧手法の特色をなす「めけ」への言及の見えるのが注目を引く。【翻刻】野口在色遺稿1。

〔尾形 仿〕

俳諧小傘 一冊。俳諧。坂上松春著。西村未達校正。内題「当流俳諧小傘」。元禄五年(一六九八)刊。【内容】室町期以来貞門・談林まで一貫して俳諧付句(句)の基調だった詞付(詞)が談林末期に至って完全に行き詰まった後、貞享初年(一六八四)頃から心付(詞)を主調とする新俳風が擡頭、元禄初・中期にかけて全俳壇的に定着した。本書はこの歴史的新事態に即応して京の啓蒙俳諧師らが相次いで著作した大衆向け俳諧指南書の一で、巻頭に「当流の心付(詞)」を理解させるための概説を置き、次いで心付の着想例を列挙する本文部「当流俳諧小傘付合(詞)指南」を収める。概説部二章のうち「引句」の部では、同じ前句に宗鑑風・貞徳風・宗因風・常短(短)風・当風と各様の付句を試みて当流の特徴を対照的

【参考文献】鈴木勝忠「江戸座俳諧の母胎」として文学2、昭和37年。○綿谷雪「俳諧」として文学2、昭和37年。○綿谷雪「俳諧」として文学2、昭和37年。

に理解させ、「前句附仕様」では当流付句の案じ方を体付・心付・付物・景氣に分けて作例によって解説。中で心付・景氣を重んじ、かつ趣向第一、前句への移りと句作りの大切を強調するところが時代的に注目される。「付合指南」部には一二七八語の見出語を掲げ、例えば「解(夜)、一、付心・肥満・童・暮臥・盗人・更夜・供部屋・夜這番の者・辨蛇」のごとく、見出語下に夜分・一座一句物等の式目事項を略記し、以下その語を含む前句への付心(趣向)を単語で例示する。これは解に肥満などの詞で付けよの意でなく、直接その詞は用いずにその心をもつて付けよの意である。この心付のヒントは大衆作者にすこぶる重宝されたらしく、現存十五種前後の重版を残すほど広く普及した。【複製】近世文学資料類従・参考文献編13。 【今 栄蔵】

【参考文献】今栄蔵「元禄初期の俳諧の問題」(『國語國文』昭和31年1月)。

【参考文獻】今栄蔵「元禄初期の俳諧の問題」(『國語國文』昭和31年1月)。

【新製】(一冊)から成り、これに連二房(渡部ノ狂(笑))と共に支考の変名(名)による惣序と跋を付して一部の書としたものである。「再撰貞享式」(宝永七年(七一〇)十月十二日序)は俳諧式目に関する芭蕉の説としての「貞享式」に注釈を加えたものと蕉風の式目観の相違を記し、「新製東花

式」(宝永六年十月十二日序)は芭蕉の式目に支考が増補を加えたものという。これらには信じ難い面もあるが、支考が晩年に到達した俳諧観・式目観を総括したものとして、その資料的価値は低くない。【付記】後代、文化二年(二〇二)巻刊の内田沾山(芭蕉)の「非支考」や、匿名の「非言録」が本書を論難している。【翻刻】俳諧叢書「俳諧註釈集」下。 【堀切 実】

【参考文献】今栄蔵「元禄初期の俳諧の問題」(『國語國文』昭和31年1月)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

【御傘大全】御傘大全拾解と西武系の「御傘西武補」御傘執柄抄、本書を抜粋した書として蘭角の「御傘提要」、秘伝書として「御傘十六箇口訣」(御傘十六ヶ条)とも、難書として松下寿来の「御傘難問」等がある。【諸本】版元を異にする次の四種の版本があるが、すべて同版である。(1)慶安四年京都林甚右衛門版。(2)万治二年(二〇九)京都安田十兵衛版。(3)刊年不明、京都井上忠兵衛・野田治兵衛版。(4)刊年不明、京都井上忠兵衛・山岡市兵衛版。【複製翻刻】「校注俳諧御傘」(赤羽学編、昭和55年)。日本俳書大系「蕉門俳諧統集」。 【森川 昭】

【参考文献】小高敏郎「松永貞徳の研究・統集」昭和31年。○木藤才蔵「貞門俳諧と連歌との交渉」俳諧式目の成立をめぐって(『国語と国文学』昭和32年4月)。○近世初期文芸研究会「貞門俳諧自註百韻」翻刻と紹介(昭和43年)。

あってこの五俳人の句集を編んだ編者の識見は高く、それは蕪村や大魯ら一派に共通のものともいえよう。【編者】五晴は書肆朝陽館の主人石原茂兵衛の俳号。大魯の社中の一人。【翻刻】俳諧文庫『元禄名家句集付女流俳句集』。同『素堂・鬼貫全集』。〔中野沙恵〕

誹諧小相撲 五冊。俳諧。平賀桂葉・大村可全編か。題簽は巻五の「田舎点者、誹諧小相撲、五」のほか未詳。寛文七年(一七五七)正月、京都三河屋刊。序に署名なく編者は不明であるが、巻一に桂葉可全の両吟点取百韻を収めるから両者の共編と推定される。【内容】「四方山の花を集めて都哉を発句とする両吟百韻に、京点者、立圃・重頼・西武・貞室・令徳・梅盛・季吟・宗隆・元隣・任口(巻二・三)、田舎点者、玄札・未得・空存・西翁・宗因・道寸・政也・長治・正友・竹犬胤及(巻四・五)、以上二十二人の評点を集め、その相違を公表して世間の評判を問おうとしたもの。『俳諧閑相撲』(天和二年(一六八二)刊)、『白うるり』(元禄三年(一六八七)刊)、『かつら河』(同)、『物見車』(同)等、この種の俳書の嚆矢をなすものである。【翻刻】秋田俳書大系・近世初期篇(両吟百韻のみ。藤原弘解説)。〔乾 裕幸〕

俳諧古選 一冊。俳諧。三宅嘯山編。題簽の「俳諧」は角書。金龜道人敬雄序(宝暦十年)、自序(同)。北門子跋(同十二年)。宝暦十三年(一七三三)正月刊。京都西村平八井筒屋庄兵衛版。守武・宗鑑から当代までの諸流の佳作を網羅した発句撰集。

【組織】本編五巻は各巻を四季と雑に充てて享保期(一七二〇一七三六)までを収め、各巻内は時代順に配列。付録は当代の作を地域別に配する。春二二七句、夏二二二句、秋一八一句、冬一六〇句、雑一九七句、追加十三句、付録三〇九句、計一三〇九句。【特色】巻頭の漢文体の「物論」は格調高い評論で、各句の左傍に加えた漢文の短評には鋭い批評眼がうかがえる。物論はその論調の骨格を宋の嚴羽の「滄浪詩話」に借り、延宝一正徳(一七三三一七三六)の盛時を中にはさんでそれ以前と以後とを区別する俳風三変の史観も、その盛尊重の立場に相応する。短評の評語は『唐詩選』の一種と見なされた『唐詩訓解』のそれに近似し、雄渾高華を好んで妙趣を尊ぶものが多い。小本一冊という判型や意匠、書名や編纂方法も『唐詩選』を模すものであり、本書は古文辞派推奨の諸書を意識的に模倣し、唐詩評の方法と護國の文学観をもって俳諧を評したものと見えよう。しかし一方で平淡にして深意を含む作風をも重んじ、むしろこれを俳諧の正格とみなして、雄渾高華の変格との兼備を理想とした。流派の枠にとらわれるを戒め、復古の目標を広く元禄諸名家に定めるなども、その高い見識を示している。

【影響】『唐詩選』の流行に便乗した本書は、俳諧史の通覧に便で、名著として広く世に迎えられた。物論に見る全国俳壇概観など、都市俳壇の点取俳諧を難し、地方蕉門の閉鎖性を鋭く批判し、蕉風中興運動の気運を醸成した。殊に近い関係にあった蕪村一派の活動に理論的根拠を与えたとと思われる。【諸本】幾度も後刷され、付録の補遺などに句の出入があると云う。【翻刻】俳諧文庫『俳諧珍本集』。俳諧叢書『名家俳句集』。

俳諧歳時記 二冊。俳諧。曲亭馬琴著。風月庵雪庭序。享和元年(一八一三)三月刊。版元は「近世物之本江戶作者部類」によれば、名古屋水楽屋東四郎・大阪河内屋太助で、「後に河太一箇の板となれり」とある。後刷に大阪柏原屋清右衛門・河内屋仁助・河内屋太助版、江戸葛屋重三郎・大阪柏原屋清右衛門、名古屋水楽

【参考文献】田中道雄『俳諧古選』の成立(『近世文学』作家と作品昭和48年)。世文学

【参考文献】田中道雄『俳諧古選』の成立(『近世文学』作家と作品昭和48年)。世文学

【参考文献】田中道雄『俳諧古選』の成立(『近世文学』作家と作品昭和48年)。世文学

屋東四郎版がある。あま彦の跋文の日付が五月であるから、実際の出版は六月ごろか。【内容】俳諧の季語二千六百余を四季別・月順に配列して解説をほどこしたものであるが、人事・宗教に関しては比較的くわしく、他部門の解説は、略述もしくは省略されている。上巻冒頭に「発端三論」を掲げて、下巻巻末には俳諧の巻式に関して詳述してある。従来の季寄(註)が京都で編纂されてきたのに対し、本書は江戸で編纂された最初の季寄であり、かつ書名も今日の俳句歳時記の基をなすところが注目される。本書はかなり広く世に行われた模様であるが、季語が月別のため、検索に不便であり、かつ解説の省略され過ぎたらうらみもな

【増補版】藍亭青藍が本書に基づきながら内容に改正をほどこして増補を加えたのが『増補改正俳諧歳時記采草(註)』である。同書は全五冊で、四季の部四冊と付録(雑)の巻一冊。嘉永三年(一八二〇)九月、藍亭青藍自序。嘉永四年十一月刊。出版書肆は、江戸英屋大助と大阪河内屋喜兵衛・河内屋太助・河内屋和助のほか、江都三、尾州名古屋二、勢州津一、京都二、阿州徳島・姫路・防州徳山各一の、全十五書肆。季語を四季別・いろは順に改編して月順に配列し、解説例句等もかなり増訂を加え、かつ季語も三千四百二十余に増してあり、季語と解説とで三九五丁を占めている。本書は明治以前における俳諧季寄の最高峰で、馬琴の書よりも至便であったため、明治以降も大いに世に行われた。【『葉草』の翻刻】積善館版(二冊。明治25年)。磯川出版会版(四冊。明治25年)。松栄堂書店・井列堂書店版(五冊。明治26年。昭和52年復刻、歴

【参考文献】田中道雄『俳諧古選』の成立(『近世文学』作家と作品昭和48年)。世文学

史図書社版)。中村風祥堂版(四冊。明治35年)。集米館書店版(一冊。大正15年)。生活の古典双書9・10。〔久富哲雄〕

【参考文献】志田義秀「馬琴の俳諧歳時記の企図者」(『俳文学の考察』昭和7年)。

俳諧作者之名寄

系譜。朝江種寛(寛文十一、十二年(六七)頃、京都本屋七兵衛刊)。【内容】主人の名寄(註)。貞徳を初めとして令徳・重頼などの七俳仙、それに安静・良保など十数名の俳人の師弟関係を系図書きにし、その後、因別に地方俳人を列挙し、更に「俳諧書物の名寄」として九十種の俳書をほぼ年代順に排列してある。そこに寛文十一年初春刊「新百人一句」が載せられていること、寛文十二年八月刊の種寛編「統詞友俳諧集」が載せられていないことにより、この間の刊行といえる。【特色】系図書きの俳人の名寄は、既に万治三年(六六)の『源氏鏡』にその濫觴をみるが、本書の規模は格段に大きく、後続の類書「俳諧家譜」「俳家大系図」に与えた影響は少なくない。全体的に記事が簡略なこと、編者種寛が立脚門のために、立脚門流に比して他門の人名が少ないことが、惜しまれる。【翻刻】日本俳書大系「俳諧系譜逸話集」。

〔市古夏生〕

俳諧寂菜

三冊。俳諧。白雄(お)著。拙堂補。文化九年(一八三三)五月刊。江戸英大助・須原屋伊八版。【内容】白雄が芭蕉の遺語、去来の遺稿、師鳥酔の説をもとに、門弟のために書き与えたもので、他見をはばかり写本で伝えられたが、拙堂が

その寛政本を底本とし、安永本によって増補、さらに私説を加えて出版したもの。上巻には発句の論、中巻には連句の作法、下巻には句作上の諸注意を述べ、員外として切字の論を付載。説くところはきわめて平明で、入門的俳論書としてすぐれた特質をもつ。【諸本・翻刻】文化九年版のほか、嘉永六年(二二)版(江戸須原屋茂兵衛ら版)もあり、版本は俳諧叢書「俳論作法集」と古典俳文学大系「中興俳論俳文集」に翻刻。また拙堂の増補を経ない写本も伝存し、天明五年(二五)吳水写本、寛政三年(三)如毛写本、文化十年八朗写本の三種を加舎白雄全集下下に翻刻。〔丸山一彦〕

俳諧猿轡

二冊。俳諧。随流著。上巻題号下に「破邪頭正/再返答」と割書。延宝八年(六六)三月刊。【内容】高政の「俳諧中庸姿(註)」をめぐる論争はやがて全俳壇を巻き込む規模に発展し、十数点に及ぶ論難書が刊行されたが、本書もその内の一つで、「俳諧中庸姿」を難じた随流の「俳諧破邪頭正」に対し「俳諧破邪頭正返答」(延宝八年二月刊)を出して反論した岡西惟中への再返答である。「破邪頭正返答」は、「中庸姿」を棚に上げてもっぱら西山宗因を弁護し、また自己を宣伝するのになしく、巻末に手本を示す意味で自作の独吟百韻一巻を掲げる。本書はそれに対し、上巻に貞徳流の正統性、宗因流の異端性を説き、下巻に惟中の独吟百韻全句の批判を記す。その姿勢は和歌一体の保守的俳諧観に貫かれ、また感情的な人身攻撃に終始して、俳論として見るべきものに乏しい。【付記】「破邪頭正返答」に対しては、別に難波津散人による「俳諧破邪頭正返答之評判」も出さ

れており、惟中はこれに「俳諧破邪頭正評判之返答」を書いて報いた。結果的にはこれが随流への返答を兼ねることになった。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編32(安藤武彦解説)。【翻刻】日本俳書大系「貞門俳諧集」。〔乾 裕幸〕

【参考文献】頼原退蔵「俳諧論戦史」(頼原退蔵著作集4、昭和55年)。

俳諧三部抄

三巻四冊。俳諧。一時軒惟中編。讚州高松の屢空庵一三序(漢文)。延宝五年(六七)十一月、大阪深江屋太郎兵衛刊。【内容】上巻は諸家の四季発句集で、本末の二冊に分かつ。本には巻頭に「俳諧大概」と題する漢文を掲げた上、春・夏の発句を収め、末には秋・冬の発句を収め、「作者因分付句数」を付す。中巻は「寓言体見習記」として、従二位藤原家隆卿以下古今の付合を多数挙げ、さらに「発句脇第三之体」を加える。巻末には「付句作者」として句引を付す。下巻は惟中自身の発句・付句集で、「一人百句」として四季別発句百句を掲げ、「惟中吟付合次第不同」として付句九十八組を収め、巻末に六編の俳文を付録する。上巻に収める発句は九二三句、作者数は巻頭の守武以下三三四名(他に読人不知)を数える。中巻付句の入集作者数は一五八名である。発句・付句ともに中世の歌人・連歌師や貞門俳人の句も掲げ、作者の住国も近畿・中国・四国・九州の各地および江戸と広範囲にわたるが、正休・鉄丸・半中ら、岡山・津山など編者の住所周辺の作者がやはり中心をなす。宗因膝下の大阪への転出(延宝六年春)を前に、持論の寓言説にもとづいて編んだ撰集で、巻頭の「俳諧大概」の所説と合わせ、惟中の庶幾し

た寓言の句体を具体的に示すものとして注目される。【翻刻】近世文学未刊本叢書・談林俳諧篇。〔米谷 巖〕

俳諧師

俳諧師とも。連歌師に対し、俳諧を専業とし、点料などの収入により生計を立てる俳人をいい、素人俳人と区分する。門下を指導する面からいえば宗匠、点評という職能から評点者と呼ぶ。ただし素人でも、その場(座)の指導者を宗匠、加点者を点者と呼ぶこともあるので、俳諧師の語が正確である。「花見車」(元禄十五年(二五三))は、京都三十九名・大阪二十七名・江戸二十九名・諸国三十一名の点者を掲げ、その数は享保初年(二六六)京都所司代登録宗匠三十三俳諧家譜や、江戸の「綾錦」(鳥山彦)、また「塵塚談」に「俳諧師宗匠といふ者、元文年中三十六人」とあるのとほぼ一致するが、以後増加の一途をたどり、正規の宗匠立機以外、自製無認可宗匠も乱立した。「花見車」はその身元を洗って、喰いつめ浪人、好色の還俗僧、破産の町人、下手職人などの各層から出ているとし、その権威も地に落ちて、「点者のかたよりひたすら会をすゝめ」「一巡よむまでもなく先づ益」、「さて翌日は宗匠のかたから礼に参り」「さきにいやがるもしらず短冊書で進じませう」等と町人化したことを嘆く。彼らの生活は、大名や豪商などの庇護者がなければ、伝授・命名・俳席染筆・評点出版が収入源となるが、それは不特定な薄謝でしかなかった。貞徳の頃の点料は沈香や土地の名物などの物納。門人宗畔は「銀一両に定め」「滑稽太平記」に「いとなく、百員額銀一両、五十員銀二匁、歌仙一匁半」(俳論)と

なり、江戸は「お定り二百五十文」(都鄙談語三篇)と、およその相場はあっても、純俳諧だけでの生活は苦しく、入花料五十二十文で一万句も集まる雑俳や月並発句会を興行し、定収入を図るのも自然の趨勢といわざるを得ない。ちなみに、撰集人集料は享保十九年(宝西)の江戸板木屋魚川が「さくら鏡」の巻末広告に「発句一句入料二匁、歌仙一卷金一步」とあるのが参考になろう。俳諧師の数は、立机という自己規制によって保たれたのであるが、寛政二年(一七五〇)に二条家が花本宗匠を復活して暁台・月居に認可、さらに、単なる宗匠認可を納金制として行うようになって各地の俳諧好きが群がり、宗匠集団内の自主規制がくずれ、素人俳人も俳諧宗匠免状が受けられたため、俳諧に巧みな人をも俳諧師と呼ぶ風潮を引き出して近代に及んでいる。(鈴木勝忠)

【参考文献】西山松之助(宗匠というもの)・中村幸彦編(芭蕉の本)昭和45年。○鈴木勝忠(当代俳諧師の実態と芭蕉(加藤敬樹編)芭蕉の本)昭和45年。

しい行為に対しては、両者の間に分韻千句を巻くという談合が、書肆重徳も加えて事前になされていったという合議説と、『七百五十韻』を見た桃青らが刺激啓発され、呼びかけに応じて急遽残りの韻を次いだという偶然説がある。合議説の理由は、(1)両書刊行の隔たりがわずか半年の短時日であり、(2)版元が両書とも信徳に親しい重徳で、本の仕立ても酷似していることなどである。偶然説は、(1)両書合わせた発句の季が千句のような配当になっていない。すなわち『七百五十韻』の発句八句は四季二句ずつで一応整っているのに対し、『俳諧次韻』の発句三句はすべて秋で興行当分の季を示していること、(2)七百五十韻という中途半端な数は当時の流行であり、千句満尾を予想したものとは言えないこと、などを理由にしている。【意義】本書は、「師の風雅見および処次韻にあらたまり(書根が峯)」「如此難歴長く続をへてと付て、是より宗因流かはれるなり(橋守)などと言われるごとく、『七百五十韻』からさらに前進し、天和調の第一歩をしるしたものとして高く評価されている。その所以は、「第一この二百五十韻の発起は、前句の心を付けて前句のことを付けぬなり。又、古語古歌にかかはらず(橋守)という荷合の言に従えば、こと(物)による表面的な付合を排して心による内面的な付合に深化し、物としての本歌本説の束縛から脱し得た点にある。たとえば「とりあへず狂歌仕る月」という前句に対し、付句をその狂歌の詞書の体で「秋の末つかた嵯峨野を」とをり侍りて」と二行書きにして句頭も他の句より一段下げて記した付合は、こと(物)による連関を捨象して、前句と付句を明瞭に切り離しつつ形式

【俳諧次韻】一冊。俳諧。桃青芭蕉(編)題簽の書名右肩に「追京七百五十韻〇二百五十句」、書名下に「江戸桃青」とする。延宝九年(一六九二)七月下旬、京都寺田重徳刊。【内容】桃青・其角・才丸(才鷹)・揚水の四吟五十韻一卷・百韻二巻及び余興の四吟四句を収める。延宝九年正月に刊行された京の信徳らの『七百五十韻』を次いで千句満尾させたもの。「表題」とする漢文の序にその旨を記し、最初の五十韻は、『七百五十韻』の最後の二句を発句・脇に擬して、三句目の体で桃青の句を始めている。【成立の経緯】俳諧において韻を次ぐという珍

で連続させ、疎句俳諧への道を示している。それは『七百五十韻』から受け継ぎ発展させた手法であったが、『七百五十韻』においてはなお本歌本説を多用し、物付の残滓を保っていた。本書はその水準を乗り越えて虚構化を進め、新奇な言葉や題材よりも一句の句作りや付け味に重点を置き、何らかの诗情さえ盛りこまれるようになったのである。その他形式的な外観においては、『七百五十韻』から受け継いだものでもあるが、擬漢詩文体俳諧ないし漢詩文的口調、怪奇趣味、童話趣味、作り名などが夙に指摘されている。【付記】本書にさらに韻を次いだ『俳諧蔓付贅(芭蕉)』が存する。一品独吟の百五十韻で、延宝九年寺田重徳刊。【諸本】「表題」中の字句が「青追(ツ)とあるのが初版で、初版訂正本では「青醉(ツ)とある。また寛政三年(一七五二)には『七百五十韻』と合わせ一そらいとした覆刻版が出されている。【複製】近世文学資料類従・古俳諧編33。【翻刻】日本俳書大系「芭蕉一代集」。校本芭蕉全集3。古典俳文学大系「芭蕉集」。

【参考文献】島居清「俳諧次韻の位置」(『連歌俳諧研究』10、昭和30年10月。○上野洋三「次韻の世界」白石佛三・乾裕幸編(芭蕉物語)昭和62年。

【越智美登子】

【俳諧直指伝】一冊。俳諧。三四坊(二柳)編。紫江坊栢舟序(安永三年)、自跋(同年)。安永四年(一七五五)正月刊。大阪石原茂兵衛ら版。【内容】「変化の事」以下十九か条より成る俳論書で、巻頭に「芭蕉庵桃青述・吾其角編集三四坊校合」と記す。序によれば須賀川の晋流に伝わったというが、第二条から第十八条前半までは、「し

るさうし」(『三冊子(芭蕉)』の(一)の全部を、順序もそのまま下敷きにし、「予常にいふのごとき芭蕉自叙の形式に改変したもの。改竄者は二柳と思われ、内容を信頼のあまりの仕業であろう。「心の俳諧」(変風の理)「実情」など独自の用語に、蕉風中期らしい俳諧理念がうかがえる。第十九条は賦物について概説する。(田中道雄)

【俳諧而形集】二十巻付録一卷五冊。俳諧。臯月平砂著。楊江子・師道・松軒・鳳翠序。自序。万里橋散人・乾坤舎山莫大跋。明和九年(一七七三)春刊。高松雪戸・谷村観之・石井雨林・吉田魚川彫版。【内容】凡例によると、著者が享保七年(一七三三)から明和七年まで四十九年間にわたって作った発句・付句・俳文等を収めたもので、発句・付句等は計四一八四句、俳文は二百編に及び、俳人の家集としては最大のもの。巻一から巻十までが発句で、天文・節序・地輿・神祇・釈教・人倫・人事・居処・飲食・衣服・器用・飛禽・走獸・鱗介・昆虫・米穀・菜蔬・果疏・草莽・樹竹・雑体の二十一部門に分け、作句の年月日、典拠等を注記している。俳文は徐伯魯の『文体明弁』に倣い、鄙歌・賦・国語詩・書記論・説・弁・解・序・引・文・箴・銘・頌等の二十六に分類。さらに巻末には同借以下諸家の四季発句三百余を付録としている。精力的な著者は、当時の江戸座俳人と交友関係を丹念に書き留めており、とくに巻七の人事では、俳人の没年等が克明に誌され、人名録的な趣をもっている。【著者小伝】平砂は臯月氏。本姓石川氏。良珍。別号、解庵・衆山・閑花林・新花林・午花林など。貞佐門の江戸座俳人として名高く、画もよくした。編著に『三孟酢』(元文

【参考文献】島居清「俳諧次韻の位置」(『連歌俳諧研究』10、昭和30年10月。○上野洋三「次韻の世界」白石佛三・乾裕幸編(芭蕉物語)昭和62年。